
A.O.G ~真剣で代行者に恋しなさい！~

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・O・G 「真剣で代行者に恋しなさい」

【著者名】

NZコード

N5712Y

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

天錠 晓は、ウサギみたいな生物を助けた事により神と出会つ。そして、神は、曉にある提案をするのだが・・・。

この作品は、真剣で私に恋してる!の設定を使った一次創作作品です。

最強・チート・キャラ崩壊苦手な方、原作が好きな方は、「ご遠慮ください。それでもいいよという方は、どうぞ暇つぶしにお読みください。

Prologue 「神の代行者』（前書き）

初投稿です。どうも作者の反省猫です。この作品は、結構原作ブレイクとかしますので、主人公最強です。原作が好きな方は読まない事をおすすめします。それでもいい方は、どうぞ暇つぶしにお読みください。基本バッドエンドとか嫌いなので、ハッピーエンドを目指したいと思います。

とりあえず、整理してみよう。

俺の名前は、てんじょう天錠あきら暁

アニメとか小説やゲームを愛するまあいわゆるオタクな大学生だ。ある日、前々からほしかったゲームを買って意氣揚々と帰っていると、ウサギのような変な生き物が子供たちに苛められているのを見かけた。

とりあえず、そのまま見過くわすのも嫌だったので、ちょうど持っていたカードゲームのレアカードを少年たちに渡すと少年たちは、もらったカードに夢中でそのウサギもどきに興味が無くなり、その場から去っていた。苛められていたウサギもどきは、左前足を怪我していたので、とりあえず家に連れて帰り手当てあてした。

手当てあてした後に、驚く事が起つた。そのウサギもどきがしゃべり始めたのだ。

ウサギ？

『いやあ～、助かりました。あなたは、命の恩人です。』

暁

『つおーしゃ、しゃべつた！』

俺は、思わず腰を抜かした。

ウサギ？

『あ、申し遅れました。私、神の従者をしております稻葉いなばと申します。以後お見知りおきを。』

そう言つと稲葉と名乗つたウサギもどきが丁寧にお辞儀をした。

暁

『あ、これは、『丁寧に俺の名前は、天錠 暁です。よろしく。』
暁も正座をし、そう言つて頭を下げた。

稲葉

『それにしても、最近では珍しい正義感を持った人ですね。』

暁

『いや、俺はただ見過』せなかつただけですよ。』
そり言つて、謙遜する。

稲葉

『それでも、他の人々は、見て見ぬふりだつたのにあなたは、私を
助け、手当までしてくれた。
本当に感謝いたします。』

暁

『いえ、当たり前の事ですから、頭を上げてください。』

稲葉は、じーと暁を見ている。

暁

『な、何か?』

稲葉

『ふむ、あなたなら我、主に会わせてもいいかもしません。』

暁

『主と云つと……神様あ………』

稻葉

『はい！善は急げと申します。行きますよ～。』

暁

『行きますよ～って……うわあ～』

稻葉にタツチされた瞬間、一人はどこかへ転移した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

暁

『んん・・・・』はどこだ？』

暁はどうやら氣絶をしていたらしく、田が覚めると見知らぬ部屋の床に横たわっていた。

？？？

『クスクスッ・・・』

誰かの笑い声が聞こえたので、その声のした方向を見ると金髪の可愛らしい女の子が立っていた。

暁

『君は・・・？』

？？？

『私は、ルー。あなたたちが云つ所の【神】よ。』

暁

『あなたが神様？』

ルー

『あ、その神様って呼び方嫌いだから、ルーでいいわ。』

暁

『（なんかサバサバした子だな。）じゃ、ルーで。俺の名前は・・・』

』

ルー

『知ってるわ。天錠 暁でしょ。あなたのことは、アキラって呼ぶわ。』

そう言って、暁を品定める目で全身を見て

ルー

『合格！』

暁

『合格つて？』

ルー

『单刀直入に言うわ、あなた、私の代わりに【セカイ】を回していく
れない？』

暁

『はい？セカイを廻る？』

ルー

『そのままの意味よ。あー、セカイといつても他のセカイね。
私が行きたいのだけど、今ここを離れるわけには行かないから
代わりに行ってくれる人を探していたの。』

暁

『でも俺普通の何も能力もないどこにでもいる大学生ですよ?』

ルー

『それなら大丈夫。私が魔改・・・ゲフシングフン!..能力与えるから。』

それを聞いて一瞬何をするのか怖かつたが、暁は、考えた。アニメやゲームでしかない出来事が今日の前で現実に起きている。それにほかのセカイも気になる。

これは、行かなければ後悔する。

ルー

『どう?』

暁

『俺でよければ。』

ルー

『本当にいいの?..』

暁

『はい、後で絶対後悔しそうなので。』

ルー

『そう、これあなたは、私の代行者ね。』

暁

『なるほど、それと色々セカイ廻るんですね?そのセカイの知識

とかは?』

ルー

『大丈夫、能力付与時に一緒に頭に入れてあげるわ。』

暁

『それならいいです。いきなりそのセカイの知識なしで行くのは、自殺行為ですからね。』

ルー

『結構、考えているのねあなた。じゃ、能力を上げるわ。何か要望はある?』

暁

『そうですね~。まずは、身体能力向上と能力限界突破、毒物などの耐性。後あととあらゆる知識と魔力と氣両方無限状態で戦闘能力向上で。』

ルー

『ふむふむ、じゃ、最初はそのセカイで最強と互角くらいで、修業したらそれ以上になるようにしましょうか?』

ちなみに前のセカイの最強が後にいくセカイの最強より強かつたら前のセカイのやつを基準にするよつにしますよ。』

暁

『それと傷ついてそれを回復させたら一回り強くなるよつにもできますか?あと、アニメや小説・ゲームの技も使えるよつにしてください。』

ルー

『ええ、わかつたわ』

暁

『はい、お願ひします。』

ルー

『今言われたやつと他のセカイの知識と後、何個か能力付き足して
おくわね。では、能力を上げるわね。』
そういふと田を瞑り、何やら咳いている。

ルー

『我・・・力・・・かの者に・・・』『えん・・・』

そういうと暁の全身が光に包まれた。

暁

『ツ・・・！』

光が收まるのを待つて、ルーは、口を開いた。

ルー

『ふう～、能力を付加したわ。後あなたの容姿も変えてもらつたわ。』

ルーがそう言つて指を鳴らすと大きな姿見が暁の前に出現した。

暁

『容姿つて・・・。誰だ。このイケメンは？』

姿見に映つているのは、髪は金色長髪で、赤い瞳をした顔立ちがF
?のセイイスみみたいな長身瘦躯のイケメンが立つっていた。

ルー

『誰つてあなたじやない?どうい感じでしょ?』

暁

『これが俺だと・・・。マジ!?』

ル

『じゃ、それそくで悪いんだけど、行つてもいいえるかしぃ。』

暁

『行くのはいいですが、一体どのセカイに行へんですか?』

ル

『あなたにいっても、るのは、【真剣で私に恋しなさい】のセカイね。』

暁

『まじこいか。わかりました。』

ル

『では、ゲートを開くわね。』

そういうと、暁の正面にゲートと呼ばれる魔法陣が出現した。

暁

『では、行つてきます。』

ル

『はい、いってらっしゃい。』

そういうと、暁は、ゲートの中に消えていった・・・

to be continued . . .

P r o l o g u e 「神の代行者」（後書き）

作者「とにかくアリとで、始まりました。A・O・G～真剣で代行者に恋しなさい～。とりあえず主人公力モソン！～」

暁「呼んだか？駄作者」

作者「いきなり、駄作者かよ！～」

暁「本当に駄だらう。」

作者「それは、認める。」

暁「認めるのかよ！～」

作者「まあ、それはおいといて。」

暁「置いとくのかよ・・・。それはいーとして題名の『A・O・G』つて 何の略？」

作者「AGENT OF GOD」

暁「まんまだな（――：）」

作者「まんまです！」

暁「開き直るなよ（――：）」

作者「とりあえず、暁の詳細なデータは、また次の回で掲載するか

「50。

暁「じゃ、なんで呼んだ？」

作者「ひとつじゅわみしこから。」

暁「下供かー！」

作者「とこり」と、次からまじりこの主要メンバーが出てきます。
では第1話でもお会いしました。「

暁「じゃーな。」

閑話休題 オリジナルキャラ設定（前書き）

主人公やオリジナルキャラの設定などです。
オリキャラ増え次第随時追加していきます。

閑話休題 オリジナルキャラ設定

-主人公 -

てんじょう
天錠 暁

性別：男

誕生日：10月2日

血液型：A型

身長：180・2cm

体重：68kg

性格：困つてる人を見過ごせないお人よしな性格

が、大切な物を傷つける者には容赦はしない。

争いは好みない
体格：長身瘦躯（程良く筋肉が付いている）

視力：左10・0 / 右10・0

趣味：料理 読書 鍛練 etc.（多趣味）

特技：全ヶ国語通訳 声帯模写

好きな物：鍋 努力している人 アニメ特撮 小説 ゲーム

嫌いな物：シソ 外道 上から田線で馬鹿にするやつ

尊敬する人：特になし。

見た目：F ?の フィロス 髪の色と瞳の色が異なり金髪赤い瞳

CVイメージ：近藤 隆

アニメ特撮・小説・ゲームが好きないわゆるオタクな大学生。神の使い稻葉を助けた事により。神のルーと出会い、ルーの提案でルーの代わりにセカイを回ることになった。

性格は、困った人を見過ごせないお人よしな性格。せんめつしかし、大切な者達に危機が迫ると鬼神の如く敵を殲滅する。ちなみに家事はプロ級。

能力一覧

- ・身体能力向上
- ・能力限界突破
- ・怪我から回復すると一回り強くなる。
- ・アニメ特撮・小説・ゲームなどの必殺技や魔法が使える
- ・氣と魔力は無限状態
- ・イメージする事によって武器などが創りだせる。
- ・毒などの耐性
- ・どんな人や動物から好かれる性格
- ・ラブコメ体質
- ・スーパー化
- ・ありとあらゆる知識を持っている。
- ・戦闘能力向上
- ・操縦能力は、神掛かり級

-メインキャラクター-

光の神 ルー＝ツヴァイト＝ルミナス

性別：女

誕生日：不明

血液型：不明

身長：156cm

体重：41kg

B：80 W：50 H：81

性格：サバサバしているが、実は結構甘えん坊。

体格：線の細いほっそりしている。

視力：測定不能

趣味：人間観察 ゲーム

好きな物：甘いもの全般

嫌いな物：辛いもの全般 外道

尊敬する人：父親

見た目・僕は友達が少ないの羽 川 子鳩 瞳は両方青。

CVイメージ・花澤 香菜

光の神。晩に神の代行者としての責務と能力を与えた人。
しゃべりは、結構サバサバしているが、結構甘えん坊で、寝るとき
には、クマのぬいぐるみが無いと寝れない
子供的に一面を持っているが、普段は、結構まともなんで、ギャツ
ブ萌えで部下からも愛されている。
父親と母親、それと一つ上の兄がいる。

沢場 涼香

性別：女

誕生日：5月7日

血液型：A型

身長：165cm

体重：53kg

B：95 W：53 H：89

性格：温厚穏やか 何事も臨機応変に対処する 茶目毛がある。

体格：抜群のプロポーションを持っている。

視力：左：2・0 / 右：2・0

趣味：読書 園芸

好きな物：天錠 暁 アールグレイ アップルパイ

嫌いな物：暁の敵になる者 外道

尊敬する人：天錠 暁

見た目：マケン姫つ！の一 条 秋

CVイメージ：原田 ひとみ

天錠家に仕えるメイド長。年齢は、24歳。元は、凄腕のスイーパー。

しかし、あるきっかけで暁を生涯の主とし、メイドになる。
性格は、温厚で人柄も良く穏やか。しかし、一度怒ると暁でも竦み
上がるほどの

迫力がある。密かに暁が好きだが、年齢の差もあり、打ち明けられ
ずにいる。

-サブキャラクター-

神の使い 稲葉

性別：不明

誕生日：不明

血液型：不明

身長：100cm

体重：10kg

性格：しつかり者。結構のんき

体格：ウサギのぬいぐるみ大

視力：測定不能

趣味：ひなたぼっこ 料理

好きな物：にんじん

嫌いな物：とうがらし

尊敬する人：ルー（神）

見た目：西 屋の口ゴのウサギ

CVイメージ：加藤 英美里

ルーの従者。見た目はウサギみたいな感じ。

性格は、結構しつかり者で頼まれた仕事はすぐ片付ける。
しかし結構のんきな為ひなたぼつことがボーとすることが大好き。

暁の事は命の恩人として気にいつている。
ちなみにこの姿は、仮の姿らしい。

関話休題 オリジナルキャラ設定（後書き）

作者「これから隨時増えていきます。」

暁「一応、眞面目に俺の設定作つてたんだな。」

作者「作らないと何かと心配ですよい」

ルー「私のもあるのね。」

稻葉「私のもありますよ！」

作者「二人とも呼んでないのに来たのか。」

ルー「あら、来ちゃ悪いの。（鋭い眼光）」

作者「いえ、悪くありません。」

暁「作者カツ」「悪いな」

作者「だまれーい、あの人怒らせるとシャレにならん。」

暁「まあ神だしな。」

作者「こほん、では気を取り直して次は本当に第1話です。ではノ」

3人「またね～」×3

第一話　『風間トトロ』誕生（前編）

ところが、風間トトロの面々が出てしゃあや～。

第1話『風間ファミリー誕生』

なんで、じつはなった。
それといつのも俺・・・子供になつてゐやんー!
どういう事だ。

ルー
『（おーい、暁）』

暁
『（頭にルーの声が・・・これは念話か？）』

ルー
『（正解よ。）』

暁
『（それは、それとしてなんで俺小 生なつてるんだ？）』

ルー

『（今からその説明するから静かに聞いていてね。あなたには、この世界の主要人物に接触してもらつわ。）』

暁
『（主要人物？風間ファミリーの面々か？）』

ルー

『（そうよ。そして、彼らと行動を共にしなさい。それ以外は、特にないもないと自由に行動していいわよ？）』

暁

『（自由にねえ・・・）』

なら、俺の行動は決まっている。風間ファミリーの閉鎖的な感じと小雪達を救う事。

今の俺ならできるかもしない。
なぜ、そうしようと思つたかといつともじこにはプレイしていくや
はりその事が気になつたからだ。
元々、人を不幸にしようといつのは正に合わないし、俺はハッピー
エンドが大好きなんだ。
それに他にも救える人がいるはずだ。

『（わかつた。それ以外にやることはない）』

ルー

『（あとは、その世界に存在しない人物や化け物いたら、話ができるなら話し合いを話ができないならば殲滅をして頂戴。）』

暁

『（世界が不安定になるからか？）』

ルー

『（じ明察。一応その事も知識として入れといてよかつたわ。）』

暁

『（とりあえず、了解だ。あ、それと・・・）』

ルー

『（何？）』

暁 『（俺の元いたセカイでは俺の存在はどうなったんだ？）』

ル 『（なかつたことになつてゐるわ、でも、その世界に戻れば元通りになるわ。）』

暁 『（そうか。よかつた。）』

ル 『（安心した？）』

暁 『（ああ、やはり自分が生まれたセカイだからな。）』

ル 『（じゃ、一旦、念話斬るわね。）』

暁 『（ああ、またな）』

ル

『（ええ、またね）』

そう言つて念話が切れた。

暁

『さて、がんばりますか。』

そう言って、用意された家に帰った。

俺のこのセカイの役は、大企業の御曹司らしい。

両親は、今「A」に属る。

世話係として、話の分かるメイド長の冴場涼香さんと、数人のメ

俺に使えてくれている。

やはり両親と離れるのは悲しいが、彼女たちのおかげでそんなにさ
みしくはなかつた。

曉

涼香

『お一人ですか？最近物騒になつてますし。護衛の者をお付けしましょうか？』

曉

いや、大丈夫。それは涼香さんも知つてるでしょ？

涼香さんは、俺の力を知っている。なので、そこまで心配していな
い。

涼香

『さうですね。暁様の心配より相手のほうが心配ですか（一）；

』

暁

『ははあ、じゃ、いつてきますー。』

涼香

『行つてらつしゃいませ。』

そつとつて見送りをしてくれた。

屋敷を出ると

暁

『さて、風間ファミリーの面々と接触しますか。』

そういうて、目的地の空き地に向かつた。

空き地に着くと案の定目標のダンボールハウスを発見した。一応、ドアの隙間から中を覗いた。すると中には、バンダナの少年が何かしている。

暁

『（あれがキヤップか。声をかけてみるか？）』

そつ思いながらドアを開けた。

翔一

『誰だ！』

暁

『じめんよ。原っぱ來たらちよつびこのダンボールハウスが田に入つたから。

これ一人で作ったのか？』

翔一

『ああ、一人で作った。それとこれは、【風雲風間城2号】だ!』

暁

『2号? 1号は?』

翔一

『作った次の日に行つたらしらなーおっさんが住んでたからあきらめた。』

暁

『なるほどね~。にしても所々やばい箇所があるな~。』

翔一

『なんだと!俺の作ったのにケチをつけるのか!』

翔一は、怒っていた。

暁

『怒つたなら、謝るよ。俺ならこの城をもつと頑丈にできるよ。』

翔一

『本当かー...どうやるんだ?』

暁

『ああ、それはね・・・』

それから俺たちは、風間城の補強案について大いに語り合った。

翔一

『おまえ、いろんな事知ってるな、友達になってくれないか?』

俺この町に来たばかりだから友達いないんだ。』

暁

『俺でよければ、喜んで。俺の名前は、天錠 暁だ。』

翔一

『アキラだな。俺の名前は風間 翔一ってんだ!』

暁

『ならショウだな!よろしく。』

翔一

『ああ!』

そういうつて、握手を交わした。

それからいろんな話をした。ショウは、親父さんと旅から旅の生活を送っていたそうだ。

で、ショウの親父さんが、そろそろ腰を下ろすところになり、この町に引っ越ししてきたのだ。

翔一

『おまえ、天錠グループの総帥の子供なのか。すげーな!』

暁

『凄いのは、父さんのほうで、俺が偉いわけじゃない。』

翔一

『じゃ、将来親父さんの会社継ぐのか?』

暁

『いや、うちの兄貴が会社継ぐから俺は継がないよ。』

翔一

『 そ う な の か 、 ジ ゃ 、 大 人 に な つ た ら 旅 に い か ね え か ? 』

暁

『 は は は ! そ れ も い い な ~ 。 考 え て お く よ 。 』

翔一

『 楽 し み だ ぜ ! 』

暁

『 あ あ ! 』

そ う 話 し て い る と 外 に 誰 か が い る 気 配 を 察 知 し た 。

暁

『 (僕 た と 同 じ く ら い) の 少 年 か 。 と い う こ と は 大 和 か 。) 』

暁

『 誰 か 外 に い る み た い だ 。 』

翔一

『 誰 だ ろ ? 出 て み る か ? 』

暁

『 あ あ 。 』

二 人 が 外 に 出 る と そ こ に は 、 荷 物 を 持 つ た 二 ヒ ル な 感 じ の 少 年 が 立 つ て い た 。

少 年 の 名 前 は 、 直 江 大 和 。

話 を 聞 く と ど う や ら 家 出 を し て き た ら し い 。

大和

『俺は、母親がうるさいから家出したんだ。しかし、俺は冷静な子供だ。

あまり遠くに行く俺の経歴に傷が付く。』

暁

『お前、あほだろ』

大和

『あほとはなんだ！』

あほと言われ、大和は怒っている。

暁

『あほはあほだ。冷静ならそんな事はしねえよ。それに家出ならもつと遠くに行け。母親を探してほしいのが丸わかりだ。』

大和

『ぐつ・・・。』

大和は、図星を言われ黙つた。

暁

『お前、人生は、死ぬまでの暇つぶしか考へてねえよな？』

大和

『実際そうだろ？』

暁

『だから、お前はあほなのだ！そんなこと考へてたら、実際かなり損するぞ。』

大和

『何?』

暁は、大和に人生とか色々説き伏せた。すると大和の顔が一ヒルな感じから打ちひしがれた感じに変化していき、OTL状態になっている。

大和

『た、たしかにお前の言つとおりだ。俺はなんてあほみたいなことを言つてたんだ。
これじゃまるでかなり痛い人じやないか。』

暁

『まあ、それが分かつただけでもいいんじやないか?今ならまだ間に合うしな。』

大和

『お前、名前は?』

暁

『俺の名前は、天錠 暁』

翔一

『俺は、風間 翔一だ!』

大和

『シヨウイチか。俺と友達になつてくれないか?』

翔一

『ああ、いいぜー。』

大和

『それとアキラ。お前の弟子にしてくれー。』

暁

大和
『弟子ー！？なんでまた？』

大和

『お前は、俺の知らない知識をたくさん持つている。それにお前が
師匠なら
俺の夢に近付ける気がする。』

暁

『夢？どんな夢だ？』

大和

『総理大臣になつてこの日本を変えたいんだ！』

暁

『へえー、これまた大きな夢だな。半端な道のりじゃないぞ？』

大和

『覚悟してる。険しい道だと思つけど、どうしても俺はその夢をか
なえたい！』

暁

『・・・わかつた。俺の弟子にしてやるよ。』

大和

『

『本当か！ありがとうございます。アキラいや師匠…』
なんか大和がうれしそうにそう言つた。おれは半ば呆れながら、

暁

・・はは。よろしくな大和。』

こうして、その日俺は、友達と弟子の両方を手に入れたのだった。

それから、引っ越してきたワン子事、岡本一子（のちの川神一子）と

島津岳人と師岡卓也が仲間に加わり、こうして【風間ファミリー】が結成されたのだった。

to be continued

第1話『風間フアミリー誕生』（後書き）

作者「とにかく」といって、思い切り原作を Hutch Break しました。」

暁「なんか大和が弟子になつたぞ？」

作者「元々、私は大和そんなに好きじゃありません。なので、あの少年時代の厨二病な性格を壊して、まともな道に戻すため、あえてこんな感じにしました。」

暁「そこまで考へてたのか、見直したぜ。」

作者「見直したって……お前私をここまでどう思つてたの？」

暁「言つて欲しいか？」

作者「いえ、ごめんなさい、言わないでください。すんませんでした。」

暁「まあこの駄作者いじりはこれくれいにして、なんかワン子達の加入が思い切り

やつつけ感否めないんだけど（――）」

作者「んーそこまで盛り上がらないからなー。まあ次の話はあの人が出でくるから少しバトルあります。」

暁「あんまり戦いたくないけどな。」

作者「そつ言わずに（――）」

暁「はあ～、わかつたからそんな顔するなよ。」

作者「わかつてくれたなそれでいい！」

暁「なんか釈然としないな～。」

作者「では、次回第2話『百代との出会い』でお会いしましょう。」

暁「はあ～、本当、めんどくさいわ～。」

第2話　『百代との出合』（前書き）

とこの事で、まじめにメインヒロインの一人川神　百代登場です！

第2話 「百代との出会い」

風間ファミリー結成から数日がたつたある日の事

同じ学校の上級生のグループが、俺達の秘密基地を奪おうと喧嘩を売ってきた。

なんとか追い払ったものの秘密基地は壊されてしまった。

翔一

『ちくしょう！あいつら秘密基地壊しやがって！』

悔しそうに怒っている。

岳人

『まつたくだぜ！にしても人数が多くすぎる。』

大和

『仕方がないよ、師匠がいたらあんなやつら倒せたけど、今、松笠に行ってるし。』

卓也

『たしかにアキラいるとすぐ決着付きそうだけど（――・）』

一子

『ねえ、キャップこれからどうするの？』

翔一

『大和、なんか策ねえか？』

大和

『んー、そうだな。助つ人頼むか。』

一子

『助つ人?』

岳人

『なんか当てがあるのか?』

大和

『ああ、川神院つて知ってるか?』

卓也

『武術の総本山でしょ? それがどうしたの?』

大和

『そこの総代の孫が俺たちの学校の上級生なんだ。名前はたしか川
神 百代』

翔一

『たしかにそいつが助つ人してくれたら、鬼に金棒だな!』

大和

『助つ人の件は、俺が行つてくるよ。』

岳人

『おう!任せたぜ!大和。』

とりあえず、川神 百代をする事に決定した。

そんなやりとりを遠くからじいーと見つめる少女が一人、

京

『・・・いいな、楽しそう・・・。』

少女の名前は、椎名 京

後に風間ファミリーの一員になるのだが、それはまた別のお話・・・。

所変わつてここは、川神院

武術の総本山にして、武の頂点。

多くの武術家が、今日も武の境地を目指して鍛練を続けている。

百代

『さてと、今日も走り込み行くか。』

そうやる気がない口調で山門を出ると一人の少年が門の前に立つて
いた。

大和

『すいません、ここに川神 百代つて人いますか?』

百代

『川神 百代は、私だが?』

大和

『いきなりで悪いのですが、力を貸していただけませんか?』

そう言って、大和は頭を下げた。

百代

『ここではなんだ、近くの川原で話を聞こつか?』

大和

『はい。』

そう言って、二人は、多馬川の川原に移動した。
川原に到着すると大和は、百代に助つ人の依頼をした。

百代

『それは、ゆるせないな、私は卑怯なやつや不誠実なやつが大嫌い
だ。

でも、何か見返りがないと私手を貸さないぞ?』

大和

『では、報酬としてこれを。』

そう言って差し出したのは、百代が集めている野球カードのレアカ
ードだった。

百代は、上機嫌でこれを受け取り、

百代

『後、こつちからお前に条件がある。おまえ私の舍弟になれ!』

大和

『舍弟ですか(ーーー)、あの拒否権は・・・?』

百代

『拒否した場合は、助つ人の件は無しだ。』

大和

『わ、わかりました、あなたの舍弟になります。』

その答えを聞くと百代は嬉しそうに

百代

『 そうか！ 今日からお前は私の義兄弟だ！ よろしくな大和。』

大和

『 よろしくお願ひします！姉さん。』

そういうて、握手を交わした。

百代

『あ、そうそうもし契約を破つたらお前を斬り殺すからな。何度も言つが

私は不調実なせーには嫌いだ！

銭し眼みて才和を見る

大和
『は、はい・・・。』
このとき、大和は心底後悔したという〇丁
とりあえず合掌 チーン

数日後、また例の上級生のグループが風間ファミリーに難癖付けてきたが、

百代によつて一瞬にして上級生たちが、倒されていつた。

上級生 A

『う、痛いよ』

上級生
B

『う、腕が！！』

上級生C

『「J、ここつ強えーー。』

上級生D

『止めろ、止めろよ。』

百代

『命乞いには見苦しいだ。』

百代は、心底楽しそうに喜んでいる。

上級生リーダー

『俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平氣で殺せる。お前も殺してやるぜー。』

しかし、両足が震えているので、ただのハツタリだとすぐわかる。

百代

『悪ねー、へえー、素敵だなあ先輩。テートしてくれー。』

大和

『あ、キレた。』

翔一

『キレたなあー。』

一子

『百代お姉ちゃん、怒つてるー。』

岳人

『俺、知らねつと。』

卓也

『あーなつたらもう止められないね。』

風間フアミリーの面々は、完全に傍観者になっていた。

百代

『先輩、あそこの3階の屋根まで付き合つてくれ。』

そういうて、近くの建物を指さし、上級生リーダーの足を持つて、その建物の屋根に一瞬にして飛び上がった。

風間ファミリー

「まさか・・・」×5

百代は、足を持つてる相手を地面にそのまま足で着地できるよう空気投げで投げ飛ばしそのまま落した。

しかし、予想もできない事が起きた。

?

『おこおこ、こじまでやる必要はないだらう。』

そう言つた少年は、落下している上級生リーダーを瞬時に助けた。

百代 side

大和の約束の通り、私は、風間ファミリーの助つ人になつた。

ファミリーの面々は、結構いいやつが多く私もこいつらが好きになつた。

そんなある日、同じ学校のあほな上級生たちが私たちに難癖付けてきた。

それで、上級生の一人が、メンバーの一子を殴つた。

その瞬間、私は怒つた。私の仲間に今何をした？

これは許せることではない。とりあえず、向こうからやつてきただ。

こちらのせいじゃない。

私の仲間に手を上げたんだ。お前達覚悟はできているんだろうな。

私は、そいつらの腕の骨を外していった。

上級生リーダー

『俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平氣で殺せる。お前も同じ様に殺してやるぜ！』

こいつは馬鹿か？そんなハツタリ私に効くかーとりあえず、こいつはあの建物屋根から落そ。

そうしよう。ただそのまま落してもおもしろくないので、両足で着地できるように落すか。

百代

『先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ。』

そういうて、近くの建物を指さし、上級生リーダーの足を持つて、その建物の屋根に一瞬にして

飛び上がった。そして、躊躇なくそのバ力を落した。しかし、予期せぬ事が起こった。

?

『おいおい、ここまでやる必要はないだろ。』

なんだこいつは？私が助けたのを見えなかつただと？

百代は、ただただ驚いていたが、やがて獰猛な笑みを浮かべた。おもしろいー！こいつはおもしろいぞ！たぶん実力は私より遙かに上だ。

こんなやつが近くにいたとは！？しかも歳は、私と同じくらいか。本当に面白い！

百代の興味は、その助けた少年に行き、いまだやつけていた上級生の事などすでに眼中になかった。

百代 side out

一子

『あれって・・・アキラ?』

大和

『ああ、間違いない、師匠だ。』

翔一

『おお、本当だ。』

岳人

『でも助かつたぜ。』

卓也

『本当だね、僕たちじゃ止められなかつたし。
メンバーは安どの表情を浮かべそう言つた。』

百代

『そこのおまえ、何者だ?』

暁

『俺は、天錠 暁 風間ファミリーのメンバーだ!』

百代

『そうか、おまえがあの・・・私は、川神 百代だ。』

そう言つて、上級生グループを鋭い眼光でにらむ。

暁

『とりあえず、その前に・・・』

上級生グループ

『ひい!!!!!!』

暁

『先輩方、この前忠告したのにまたつつかかってきたのか?
俺言つたよな?次つづかかつてきたら殺すと・・・。』

暁は、軽く殺氣を放ち言つた。

上級生グループ

『す、すんませんでしたm(ーー)m ×15

上級生たちは、おもいきり暁に土下座した。

暁

『もう一度とつつかかるな、とつかつてきたら・・・』

上級生グループ

『はい、もうつつかかりません!――!』 ×15

暁

『さて・・・』

暁は、腕の関節が外れている上級生たちを関節をはめ直して行つた。
ゴキッゴキッ ×14

上級生達の断末魔がこだました。

（数分後）

上級生たちは、一団散に逃げ出した。

暁

『ふう、やっと終わつたな。』

そう言つて、暁が一息ついていると

百代

『おい、おまえ!私と勝負しろ!』

曉

『ニニニナ。どうなんだし、お湯のところにいか?』

百代

『ああ、いいとも!』

大和

『師匠あつさり勝負受けたね。』

翔

- 2 -

『アキラ強いものね！』

岳人

『ああ、あいつが負けたとこみたことがねえ。』

卓也

二二二

そ二語ながら 風間一介の面々は川神院は尊重した

- - - - -

百代

『じじイ！いるか？』

そう呼ぶとりつぱな髪を蓄えた老人が奥の間からでてきた。

鉄心

『なんじゃい、百代騒々しい!』

百代

『……ひとつと手合わせしたいんだ。審判してくれ。』

鉄心

『ん？ どの子じゃ？』

暁

『俺です、はじめまして天錠 暁と申します。川神 鉄心殿。』
そう言って、頭を下げた。

鉄心

『お主、なにか武術をしておるのか？』

暁

『はい、我流ですが・・・』

鉄心

『ふむ・・・。』

鉄心は、暁をじいーと観察するように見ている。
実力は百代より上か。しかも相当な武を持つておる。
これは、百代にいい相手ができたわい。

鉄心

『よからう、修練場で手合わせを行おう。』

百代

『本当か！ いくぞアキラ！』

暁

『ああ。』

そいつって、鉄心を加え修練場に移動した。

修練場では、師範代の糸迦堂 刑部とルー・イ が、門下生と修練

していった。

鉄心

『釈迦堂とルーこっちにきてくれ。』
二人は、鉄心の元にやってきた。

釈迦堂

『総代何か用ですかい?』

鉄心

『今から百代とそつちにある少年の手合わせするんでのう、
門下生達の修練を一時やめてもらえんか?』

ルー（師）

『ハイ、ワカリました。一時修練中断ね。』
そう言つと門下生達は、端のほうに移動した。

鉄心

『すまんのう、百代、アキラ君と言つたか中央へ。』
そう言つと一人は、中央で相対する。

鉄心

『では、これより手合わせをはじめる。東方！川神

百代！』

百代

『ああ！』

鉄心

『西方！天錠 暁！』

曉

はい！

鉄心

『それでは、はじめい！』

百代

にあああああ～～～！

先に動いたのは、百代たつた百代の鋭い複数の突きが、暁を仕留めようと狙つてくる。

しかし、暁は、最小限の重きでその鋭い複数の突きをなんなく躊躇

百代

『チイ！！！！

百代は、舌打ちすると攻撃を蹴りに変えてきた。

百代

ウラアウラアウラアウラア！！

連續の蹴りが曉を襲う。しかしながらなんなく躰し、百代の足を掴みそのまま

曉

ドガあ！！！！

地面に叩きつけた！！

百代
「グハあーーー！」

暁

『まだ終わりじゃないだろ?』

百代は、一瞬にして体勢を整え構える。

百代

『ああ……』

暁

『ハハ！ そういなくつちやな！』

暁は、そう言いつとつれしそうに笑いながら言った。

二人の戦いはまだ始まつたばかり……。

to be continued

第2話『百代との出会い』（後書き）

作者「ノリノリだね、暁。前回めんどくさいって言つてた割には……」

暁「やつてみたら意外に楽しかった。」

作者「まあ、いいけどね。」

暁「そういえば、チヨロッと京でてきたね。」

作者「ちよつと出したかったしね。でも本格的に出でるのは、3話くらい後です。」

暁「そうなんだ。」

作者「それまで連続でバトルが続きます。」

暁「もしかして……。」

作者「たぶん考へている通りかと……。」

暁「はあー、俺にはのんびりする時間はないのか……。」

作者「あ、そういうオリキャラ情報更新します。」

暁「ああ、涼香さんか。」

作者「そそ。では次回第3話『決着、そして……』でお会いし

ましょいっー。」

暁「ではまたなー！」

第3話　『決着、そして・・・』（前書き）

暁VS百代の続きからはじめる～

第3話　『決着、そして・・・』

鉄心 side

全く驚いたわい・・・。まさかここまで一方的とは・・・。
鉄心の額から汗が流れる。
しかも、あの少年本気を出しておらん。
この子ならば百代を正しい武の道に導けるかもしれない
鉄心は、心の底からそう思った。

鉄心

『ほおほ、それにしても・・・、儂も久々に戦いたくなつたのう。』
そう言って、鉄心は微笑んだ。

鉄心 side out

百代

『ウオリヤー――――――――――川神流・致死量――――』

バシュン!! バシュン!!

百代の掌から無数の氣弾が飛んでいく。それはさながら本当に量の
様だった。

暁
『はあ――――――!』

しかし、暁は、回し蹴りで全ての氣弾を打ち落とした。

百代

『そいつは、オトロだ！！喰らえ！川神流・無双正拳突き……。』

「ゴーン……！」

暁の身体に鋭い正拳突きが、突きあたる。

百代

『どうだ……何つ……。』

たしかに無双正拳突きが暁にヒットした。しかし、その突きは、暁の掌でガードされている。

暁

『なるほどな、その歳でこの威力か。うんじゃ俺も少し本気を出すよ。』

そう言つた瞬間、百代の背筋にゾクつとした。まるで首筋に死神の鎌が当たられてるような感覚。

やられる…といつ思つた百代は、一旦後方に飛び退き、また構えた。

暁

『うんじゃ、いくぞ！』

その瞬間、暁の髪と瞳が変化した。髪の色は金色。瞳は赤に。

百代

『なつー。』

百代は驚いている。

説明しよう！

普段は、髪と瞳は、黒になつてゐる。さすがに金髪赤い瞳だと目立つので、

一応ルー（神）に頼んでおいたのだ。

百代が一瞬隙を見たのを暁は、見逃さなかつた。

暁

『機神拳無双奥義・真 霸 龍 撃 烈 破！』

両手から龍の形をした氣弾を百代に連續に当て、百代の身体を上空に押し上げた

百代

『ぐつ……』

百代は、空中で迎撃の態勢を取るが、暁は、超神速で脚に霸氣を纏いそのまま百代に強烈な飛び蹴りを撃ち込んだ。

ドゴー――――――――――――――――――――――――――――

百代

『ぐはあ……』

百代は、飛び蹴りを喰らひ地面に叩きつけられた。

百代のダメージは、立つことがままならないほどだった。

それを見ていた鉄心は、

暁

『勝負あり！百代戦闘不能により、勝者 天錠 暁……』

そう高らかに勝敗を告げた。

暁は、百代に駆け寄り

暁

『大丈夫か?』

百代

『ああ、大丈夫だ。もう少ししたら動ける。にしてもおまえ、強いな。』

そういうて微笑んだ。

鉄心

『百代、どうだったかの?』

百代

『世界は広いな、じじい。ますます世界に旅に出たくなつたぞ!』

そう元気に答えた。

百代がこんなにすつきりした顔するとはのう。

本当にありがとうございました、暁君。

お主のおかげで百代は、また一回り心が成長した。

鉄心は、心の底から暁に感謝した。

釈迦堂 side

まさか百代に勝つちまうとはよ。面白い餓鬼だな。

俺もいつちょ戦いたくなつたぜ!

釈迦堂は、獰猛な笑みを浮かべた。

釈迦堂 side out

ルー師範 side e

百代、良かつたネ。

本当の強敵とせきに出会えお出でテ。

にしてもアノ武術ハ一体?

ルー 師範代 side out

暁

『さて、鉄心殿お願いがあります。そこにいる師範代一人と勝負させてもらえませんか?』

鉄心達川神院全員が驚いた!?

鉄心

『なぜじや?』

暁

『今は言えませんがこの勝負が終わったら理由をお教えします。』

暁は、真剣な表情でそう答えた。

鉄心

『何か理由があるんじやな? 良からう、釈迦堂とルー一人ともこの子と仕合なさい。』

ルー(師)

『総代お言葉ですが、その子は、まだ子供ですヨ? もしものときだつてあります!』

釈迦堂

『ルー、じゃ、おまえはそこで見てな! それにその餓鬼は、普通の

子供じやない。

俺たちと同じ武術家だ！
そう言って、ルーを睨んだ。

ルー（師）

『しかし・・・』

ルーは、迷っている。

暁

『お心遣い感謝しますが、遠慮なんてしないでください。ここから先は、武と武の真剣勝負です。
それにそれは俺に対する侮辱ですよ。』

ルー（師）

『一。』

ルーは悟った。この子は覚悟ができている。ならばそれにに対して、子供だからといった理由で勝負をしない事は、失礼にあたる。

ルー（師）

『分かった。ならばお相手しよう。』

ルーの細い目は、見開かれ本氣という感じすぐ伝わった。

鉄心

『では、どちらからいくかの？』

釈迦堂

『俺から行くぜ！』

そう言って、釈迦堂が修練場の端から一気に中央へやってきた。
ちなみに百代は、風間ファミリー側に横に置いてきた。

暁

『では、よろしくお願ひします。』

釈迦堂

『ああ、よろしくな!』

そつまつてお互い礼をした。

鉄心

『それでは、仕合を始める! 東方! 釈迦堂 刑部!』

釈迦堂

『オウ!』

鉄心

『西方! 天錠 暁!』

暁

『はい!』

鉄心

『それでは、はじめ! !』

そして釈迦堂と暁の死合が、始まつた! !

第3話『決着、そして・・・』（後書き）

作者「圧勝だつたね。」

暁「まあな、百代は、まだそんなに強くないし。」

作者「まあね、瞬間回復能力あつたらやばかつたと思つたけど・・・。」

暁「まあ骨は折れるけど負けないよ俺？」

作者「まあ、それは置いといて。」

暁「置いとくなよ（――・）」

作者「次は、釈迦堂さんとの死合だね。」

暁「一瞬誤字だと思つたらたしかにそつなるだらうな。」

作者「それはそうと暁が使つた技の説明をば。」

技名

機神拳無双奥義・真霸龍撃烈破

無数の龍の形をした氣弾を連続で撃ち込み相手を上空へと押しやり、無防備な相手に気を纏つた脚で飛び蹴りをする機神拳の機神拳無双奥義。

主人公アレティ・ナーシュの必殺技。

作者「いやー、やっぱこれでしょー。」

暁「たしかに、いつ系统には、合ひそうな技だな。」

作者「ところで、次回、第4話『积迦堂 刑部』でお会いしま
しょう!』

暁『うんじゃなー。』

第4話『糺迦堂 刑部（前書き）

とこり事で、川神院での戦いはまだまだ続きます！

第4話『釈迦堂 刑部』

その少年は、孤独だつた。

少年は、天才であるがゆえ、周りから嫉ねたみ・疎うとまれた。

少年は、どんどん孤独になり、性格も歪んで行つた。

歳月が過ぎ、少年から青年になることには、男は、暴力の日々を過ごしていた。

そんなある日、青年は、川神 鉄心に出会つた。それが運命の出会いだつた。

青年は、川神院の門弟になり、凄まじき速さで川神流を習得し、師範代にまでなつた。

しかし、そこでも青年は、孤独だつた。

力を追い求めるがゆえ、彼は、戦い続ける修羅の道のスタート地点に立つていたのだ。

その青年の名は・・・【釈迦堂 刑部】

鉄心

『それでは、仕合を始める！ 東方！ 釈迦堂 刑部！！』

釈迦堂

『オウ！』

鉄心

『西方！ 天錠 暁！』

暁

『はい！』

鉄心

『それでは、はじめて！！』

鉄心から開始の合図があつたが、一人は、構えたまま動かなかつた。

釈迦堂

『そつちがこないなら、こつちからいくぜ！』

そういうて、釈迦堂は、大地を蹴つて、一瞬にして暁の間合いを詰めた。

暁

『（速い！）』

釈迦堂

『オラ！…オラ！…オラ！…！』

高速の突きが、暁を襲つ。

暁

『ちイ！…！』

暁は、その突きに臆することなく迎撃していく。

釈迦堂

『ハハハ！…なかなかやるじゃねーか！ならこれでどうだ。川神流・星殺し！…！』

拳圧から発せられるソーックブームが暁に直撃し、後方に吹つ飛ば

される！

暁
『ぐつ……』

すぐ様、体制を整えるが、もう田の前に釈迦堂が距離を詰めていた。

釈迦堂

『遅せえ！！川神流・大蠍撃ち！……』

暁の腹に鋭い突きが、突きわたる。

暁

『ぐはあ！……』

暁は、地面に倒れた。

釈迦堂

『もう終わりか？偉そうな事言つてた癖にこの程度か。もう少し
楽しめると思つたんだがな。』

釈迦堂は、地面に倒れている暁にそう落胆したような感じで言つた。

風間ファミリー side

百代

『相変わらず、釈迦堂さん、容赦ないな（ - - - - ）』

一子

『アキラ！……』

大和

『ワニ子落ち付けつて、師匠が負けるわけないだろ？』

翔一

『ああ、そうだな！』

岳人

『で、でもよ。動かねえーぞ（@_@;）』

卓也

『大丈夫かな～アキラ（――；）』

百代

『あれだけ決まればまず動けないだろ？』

翔一・大和・一子・岳人・卓也

『そんなん』 × 5

それを聞いて5人は、真剣で心配になつたが、

暁

『痛つてえ～。』

そう言つて、すぐ立ちあがり構えた。

釈迦堂

『なつ！～』

暁

『やつぱ、川神院だけあつて強いや～。』

釈迦堂

『おいおい、まじかよ、そんなにダメージないだと…？』

全員

『（@ @ -）！』

全員口をあんぐり開けていた。

暁

『さて、本氣出やうかな。』

釈迦堂

『本氣だと！』

風間フア //コーサイド　out

暁

『さて、本氣出やうかな。』

今なんて言つた？さつきまでが本氣じゃなかつただと？
ふざけるなー！今までこけにされたのは、はじめてだ。
こいつは、殺す！絶対殺す！

釈迦堂から禍々しい氣が全身から放たれる…

釈迦堂

『おー！餓鬼！…調子に乗らせて置けばいい氣になりやがって…』

暁

『釈迦堂さん、あんた負けた事無いでしょ？あんたは一度負けたほうがいいよ！』

その瞬間、暁の氣が一気に膨れ上がった。

百代

『なつ……』

鉄心

『なんじゅと……』

ル

『ナント……』

釈迦堂

『なつ・・・。』

川神院全員が驚いている。

暁の氣は、釈迦堂の禍々しい氣より遙かに大きかった。

おいおい、シャレになんねえぞ！！

この力は、まるで総代級じゅうだいきゅうじやねーか・・・。

あの氣に比べれば俺の氣なんてカスに等しいじゅうだいじやねーか・・・。
あの餓鬼トンデモねえ・・・。

しかし、この氣はなんだ？

人が出せる氣じやねーぞ。

どつちかと言えば神とかそいつた類の神聖さのある氣だ・・・。

今更ながら、釈迦堂は後悔した。

自分は、天才だと思っていたが、
この少年に比べれば自分は凡人。

俺は、なんて勘違いをしていたのだろう。

正に自分は、井の中の蛙だったのだ。

釈迦堂が呆然としていると目の前の暁の姿が、一瞬にして消えた。

釈迦堂

『なつ……どこいつ……！……！』

もう目の前に暁がいた。

曉

『荒れ狂う殺劇の宴！殺劇舞荒拳！』

糸廻堂に蹴りや拳などのままで蹴つを蹴つてゐるかの如く連続して擊
ち込む――

曉

エスツ
エイジン バ# 赤# エ#!

新邊堂

新迦堂は、まるでサンザハッケの如く殴られ蹴られまぐいた。

曉

『これで最後だ！！』

そこで新迦陵の額を掛けてアツハリガットが炸裂した。

新迦堂

「ぐはあ！」

釈迦堂は、天空に上げられそのまま受身を取れずに地面に叩きつけられた。

鉄心

新迦堂！！！

祈迦堂は、地面に横たわったまま動かなかつた。

糺迦堂

『・・・』

どうやら氣を失つてゐるようだ。

鉄心

『ほつ。』

鉄心は安堵の息を吐いた。

鉄心

『それまで、勝者、天錠 晓!!』

川神院門弟たちは、驚きを隠せなかつた。

百代

『アキラが勝つた・・・。まじか・・・(@ @ ;;)』
百代は驚いていた。たしかに私より遥かに強いとは知つていたが、まさか糺迦堂さんを倒すとは・・・。あいつの本当の実力は一体・・・。

ただただ呆然とするのだった。

それを横目に風間ファミリーのメンバーは、暁の勝利を喜んだ！

to

be continued

第4話『糺迦堂 刑部』(後書き)

作者「とにかくとで、いかがでしたでしょうか?」

百代「糺迦堂さんには勝っちゃつたよ(――・・)」

作者「たしかにアイシビニまで強いんだうね(――・・)」

百代「いや、おまえが驚いちちやダメだろーー!」

作者「てへつ」

百代「きじょいわ! 川神流・雪だるま」

カチーン

作者「つ、つべた・・・い」

パリーン

作者「冷たいわ!」

百代「何つーあれを破つただと・・・」

作者「作者なめんな!」

暁「一体何してるんだか・・・(――・・)」

作者「それはそれとして、今回使つた技の説明タイム!」

技名

殺劇舞荒拳

拳や蹴りなどで敵を攻撃する乱舞技

登場作品・テイルズシリーズ

作者「いや、使ってみたかった技です。」

暁「たしかに違和感ないよな、この技。」

百代「私が覚えてたら使えそうだし。」

作者「うんうん。さてとそろそろ。

次回、第5話『伝えたかった事』でまたお会いしましょう。

「

暁・百代「では、またね♪」×2

第5話 「伝えたかった事』(前書き)

次は、ル一師範代戦とゆいきや・・・

第5話 「伝えたかった事」

暁 VS 稈迦堂は、暁の圧倒的な戦闘力の前に稈迦堂はなすすべなく倒された。

それから30分後

暁
『これでよしつと。』

暁は、稈迦堂と百代に治癒功ヒーリングを使い、傷を治した。

百代

『これは、内氣功か？一瞬で傷が癒えたぞ！』

百代は興奮しながらそう言った。

暁

『ああ、その通りだ。俺は、治癒巧と呼んでいる。』

鉄心

『ほほほほ、その歳で、氣を自在に扱えるとは、本当に末恐ろしいのう。』

暁

『いえいえ、まだまだです。』

そういうて、暁は謙遜した。

鉄心

『まつまつま、謙遜せんでいいわい。』

そうやって、鉄心達と話していると稈迦堂が目を覚ました。

釈迦堂

『つ・・・、俺は・・・。そつか、敗けたのか・・・。』

ルー（師）

『あ。』

釈迦堂

『俺は、今まで自分を天才だと思っていたが、間違いだつたんだな。』

ル

『釈迦堂・・・』

鉄心

『暁君、君はなぜ、百代や釈迦堂と仕合じよひと思つたのかね？』

暁

『それは、このままあの状態でいけば一人は、修羅の道を歩みそつだつたからです。』

釈迦堂・百代

『！』 × 2

二人は、ドキッとした。図星だった。

鉄心

『気付いておつたか・・・。』

どうやら鉄心も薄々そう思つてたらしい。

暁は、『クリと頷いた。

暁

『二人はどうやら同世代もしくは年下の人に負けた事はなかつたのでしょうか。』

そういう人は、人に敗けた時、かなり脆い。』

釈迦堂・百代

『・・・・。』 × 2

暁

『人間一回は、挫折したほうがいいと思います。』

鉄心

『それはなぜかね?』

暁

『慢心があるからです。』

釈迦堂・百代

『・・・・。』 × 2

暁

『自分は強い、誰にも負けないそういう慢心した状態だと視野が狭くなる。』

『極端な話、自分の周りしか見れなくなる。』

釈迦堂・百代

『！』

『どうやら思い当たる節があるようだ。』

暁

『一度敗け、挫折を知った時、狭かった視野も広くなる。視野が広くなれば、いろんな事にも興味が出て、自分の世界が広がる。そういうのがあってはじめて人は本当の意味で強くなる。』

暁は一人を見据えた。

釈迦堂

『はあ～、参ったね、まさかかなり年下に教えられるとはねえ～。そりいって、頭を搔きながら、なんともすつきりした顔をしていた。』

百代

『たしかに私の視野は狭かったかもしれない。こんな近くに私よりも強い奴がいたんだからな！』

百代は嬉しそうにそう答えた。

二人とも肩の力が抜け、憑き物が取れた様な清々しい顔をしている。釈迦堂に至っては、若干濁っていた目も濁りが無くなつて禍々しい雰囲気は無くなつていた。

暁

『後、もう一つは、鉄心殿。たしかに川神流は、伝統とか色々あるかもしさせんが、それに合わないからダメとかおかしいと思いますよ？それも視野が狭くなつてる証拠ですよ。』

鉄心

『た、たしかにのう（一・一・一）儂も視野が狭くなつていたようじ

やのん。『

暁

『わかつてくれればそれでいいですよ。もしわかつていただけてなかつた場合は・・・

潰してましたから・・・川神流。』

そう言つた瞬間、明らかに先ほどの数倍以上の氣を暁は出し、背後に般若の顔が見える。

ゾクッ！

鉄心は、動けなかつた。額から冷たい汗が流れる。

この少年は、儂と同様・・・いや、儂より強い！！

鉄心は2度とそんな事考えないようにしてようじて本氣で思つた。

他の全員もガクガクと震えていた。

怖ええ・・・！！！

暁は、殺氣を消し、

暁

『とりあえず、ルーさんとの仕合しましようか！』

そういうて、微笑んだ。

鉄心

『そ、そりじゃのう。ルーーに向ちに来なさい。』

ルー

『イヒ、私は遠慮させていただきマス。今ノ私では、到底勝てませんしね（－－－）』

困った顔でそう言った。

鉄心

『そう言つたるが、（暁君）どうする？』

暁

『そうですか。ルーさんとは戦つてみた方での残念です。』

鉄心

『まあ、仕方ないのう。とこうことで、仕合は終わりじゃ、騒がしてすまなかつたのう、皆の衆。』

そう鉄心が言つたその時、

？？？

『ナソダヨ、セツカクイイカンジニ魂ガケガレテタノニヨウヘ』

するとどこからか誰かの声がした。

釈迦堂

『ガあ！…』

釈迦堂の口から黒い靄のようなものが出てきた。

その黒い靄が集まり、人型へと姿を変え、そこから、

顔はイナゴで腕が4本2対の人型のバケモノが姿を現した。

一子

『キヤー……………バケモノ！…』

岳人

『おいおい、なんだありや～！…』

卓也

『あ、あいつは・・・!』

翔一

『いい!』

大和

『俺は夢でも見てるのか?』

風間ファミリーの面々は、混乱している。

鉄心

『なんじや、あれは・・・。』

百代

『なんなんだ、あれは。』

釈迦堂

『お、俺から・・・出てきた・・・だと!?』

ル

『アイヤー、妖怪ネ!-!』

暁

『あれは・・・悪魔!-!』

to be continued

第5話『伝えたかった事』（後書き）

作者「ついに【敵】が現れた！！」

暁「これは意表を突かれたぜ。」

作者「次回は、暁君の武器での戦闘が見れますよ。」

暁「ああー！」

作者「それは次回のお楽しみといつ事で恒例の技紹介のコーナー。」

技名
治癒巧

氣功で相手の体力を回復させる技

登場作品・テイルズシリーズ

作者「次回、第6話『悪魔』でまたお会いしましょうー。」
暁「では、次の話でー。」

第6話『悪魔』（前書き）

ちなみに登場した悪魔の名前は、【ヴァースト】と言います。
ということで初の人外との戦いです。

第6話『悪魔』

暁

『あれは・・・悪魔!!』デーモン

百代

『あれを知ってるのか!?』

暁

『ああ、あいつらは、この世界の物じゃない。悪魔界というセカイに棲む異形の物だ。』

見たところ、下級ランクと言った所か。』

百代

『あれでか! あれはどう見てもじじいクラスだぞ!』

百代の言うとおりである。悪魔が発してた禍々しい邪気は、軽く川神 鉄心クラスだった。

暁

『ああ。』

ヴァースト

『説明ハ終ワツタカ? 小僧。』

複眼で暁を睨みつけている。

『ヨクモ邪魔シテクレタナ、アトモウ少シジテ、魂ヲ收穫デキタノニヨ。』

釈迦堂

『魂を收穫だと? ふざけるな!』

暁

『なるほど、最初からお前の仕業だつたわけか?』

ヴァースト

『勘違イスルナ小僧。元タソイツハ魂ガ穢レカカツテイタカラナ。チヨツトオ手伝イシタダケサ。ケケケwww』

暁

『お前たちにとつて、穢れた魂は何より美味しいらしいな。』

ヴァースト

『アア、ヨダレガ出ル程ニナ。』

暁

『なるほどな、さて、俺はある人物から依頼されててな。お前みたいなやつを狩る仕事をしている。』

ヴァースト

『何? オマエハモシカシテ、悪魔狩りか?』

暁

『いや、違う。そだなじいて言えば【神の代行者】って、とこかな。』

ヴァースト

『!、キサマガカ!』

暁

『知つているのか?』

ヴァースト

『俺ヲコノセカイニ召喚シタ男ガ、ソウイツテイタ。』

男？そいつが黒幕か。

暁

『召喚した男って言つのは？』

ヴァースト

『コレ以上シャベルト俺ガ消サレルノデネエ。』

暁

『ふむ、そつか。とりあえず、お前を滅するー。』

その瞬間、圧倒的な氣が放たれた。

ヴァースト

『残念ダガ、ヒトマズ逃げサセテモラウゼ。』

そういうて、逃げようとするヴェーストを

暁

『ゴルゴネイオン！』

光の複数の輪がヴァーストの動きを封じるようになると束縛した。

ヴァースト

『ナツ！動ケネエ。』

ヴァーストは、ジタバタしている。

暁

『続けて、五連結界（小）』
暁とヴァーストを包むかの如く半径500m一帯に強力な結界を張つた。

百代

『おい、アキラ何をしてる！』

暁

『こいつは、俺が滅する。今いるメンバーでは俺しかこいつを倒せない。』

百代

『なんだと！…』

暁

『事実だ。お前たちでは、悪魔に傷をつける事が出来ない。できるとすれば・・・。』

そういうて、左手を前につき出し、

『create!! 我、求めるは、魔を斬りし剣、現れ出でよ…魔戒剣！』

そういうと一振りの剣が突然現れた。

ヴァースト

『ソ、ソレハ魔戒騎士ノ！』

暁

『知ってるらしいな。では往くぞ！』

ヴァーストを拘束した光の輪が解かれ、自由になる。
暁は、手でクイクイと挑発している。

ヴァースト

『オノレ、返り撃チーシテヤル！！』

そういうて襲いかかってきた。

暁は、剣を抜き、頭上に円を描いた。その瞬間円の内側から光が漏れ、

一瞬にして、暁は、黄金の獣の仮面を付けた騎士姿になつた。

そして、剣も先ほどの細い剣から幅広の装飾が美しい剣【牙狼剣】へと変化した。

ヴァースト

『黄金騎士だと…？』

ヴァーストは驚いていた。

暁は、剣を横にして、魔導ライターで緑色の炎を付け、剣に炎を纏わせた。

ヴァースト

『クッソー！コケニシヤガッテ！死ネー！！』

ヴァーストは、全ての手の爪を伸ばし、襲いかかってくる。

暁は、剣を構え、

暁

『空破斬！！』

炎を纏つた剣を超高速に振り、緑の炎を纏つたソーックブームを発生させた。

憐れ、ヴェーストは、真つ二つになり、そのまま炎に焼かれた！！

ヴェースト

『グギャ――――!』

ヴェーストは、断末魔を上げそして跡形もなく消え去った。

それを確認して、暁は、黄金騎士状態を解除した。

暁

『ふう〜。』

百代

『アキラ・・・お前は一体何者だ?』

b e c o n t i n u e d

t
o

第6話『悪魔』（後書き）

作者「とらあえず、悪魔との戦いかがだったでしょうか？」

暁「俺、牙狼になっちゃった（……）」

作者「一応、説明するけど暁のcreateは、イメージしたもの全部作れます。しかも、オリジナルと同等もしくは、それ以上で。

」

暁「イメージだけでそこまで作れるか？」

作者「何にあほ言ってるんだみは。おまえには、ありとあらゆる知識あるだろ？（……）」

暁「そういうば、そうだった。あまりに出て来ないからすっかり忘れてた。」

作者「しつかりしてくれよ主人公。」

暁「なんかこいつに言われるとなんかむかつく！」

作者「とらあえず、暁は、放置して……」

暁「放置するな！あ、一つ疑問が？

悪魔倒すの物凄くあつたりしてないか？」

作者「それはですね～。ヴァーストも弱くはなかったんですよ。鉄心クラスだし。でもそれ以上に暁が強かつたそれだけの

話です。」

暁「なるほど。」

作者「毎度おなじみ技の説明コーナー。」

技名
ゴルゴネイオン

光の複数の輪で相手を包み込み拘束する技

登場作品・カミカゼ エクスプローラー

技名
空破斬

剣風でソニックブームを起こし、敵を攻撃する技。

登場作品・スター・オーシャンシリーズ

作者「さて次回、第7話『二人の少女』でまた会いましょう!」

暁「では、次回も活用してみよー!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5712y/>

A.O.G ~真剣で代行者に恋しなさい!~

2011年11月20日10時05分発行